様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５２０２９３

研究課題名（和文）１９４０年代初頭の文学作品に見るアメリカ南部の文化的自画像に関する研究

研究課題名（英文）A Study of the Cultural Self-image of the American South in Southern Literature in the Early 1940s

研究代表者
小谷　耕二（Kotani, Koji）

九州大学・言語文化研究科（研究院）・教授

研究者番号：４０１２７８２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、1940年代初頭のいくつかの文学作品をとおして当時のアメリカ南部の文化的自画像を探る試みである。主として取りあげたのは、W.A.パーシーの自伝『護岸の灯火』、フォークナーの小説『村』、ロバート・ペン・ウォレンの伝記『ジョン・ブラウン伝』である。『護岸の灯火』では、作者パーシーの南部思想史の位置づけを再考した。『村』ではラトリフの語り口と当時の文化的言説を検討した。ただしこれはまだ未定稿であり、公刊には至っていない。『ジョン・ブラウン伝』に関しては、神話化されたブラウン像のウォレンによる脱神話化を分析し、またそこから見えてくるウォレンの思想と南部の文化的的自画像を考察した。

研究成果の概要（英文）：In the present study on the cultural self-image of the American South in Southern literature in the early 1940s, I took up mainly three literary works: William Alexander Percy’s Lanterns on the Levee, William Faulkner’s The Hamlet, and Robert Penn Warren's biography of John Brown. I investigated Percy’s mental attitude to the traditional values of the aristocratic segment of Southern society and pointed out the possibility of detecting Percy’s potential inclination for a liberal view of Southern history, despite his accepted reputation as an apologist of the traditional South. My discussion of Faulkner’s The Hamlet, which is not yet complete enough to be published, centers around Ratliff's way of narration and the cultural discourses spread in 1930s. As for Warrn's biography, I discussed his demystification of Brown and his criticism of Ralph Waldo Emerson and the concept of the higher law, which lies behind the mythologized figure of Brown.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アメリカ文学　ウィリアム・アレクサンダー・パーシー　ウィリアム・フォークナー　ロバート・ペン・ウォレン　『護岸の灯火』　『村』　『ジョン・ブラウン伝』　南部文芸復興

１．研究開始当初の背景

筆者はこれまでアメリカ文学史上「南部文芸復興」と称される時期の文学と思想を研究してきた。この時期、農業中心の貧しく遅れた地域であったアメリカ南部に当時としては先端的といってもよいモダニズム文学がいっせいに花開いている。そもそもそのことにたいする疑問が研究の出発点にあった。南部の後進的な社会および保守的な価値観と斬新なモダニズムがどのような内的ロジックによって結びつくのか、そのことに関心があったのである。

そこで筆者はこれまで南部文芸復興期の文学や思想の包括的研究の可能性を念頭に置いて、この時期の最大の作家であるウィリアム・フォークナーはいうまでもなく、アレン・テイトやアンドルー・ライトルなどのいわゆる南部農本主義者、さらにはロバート・ペン・ウォレン、ウィリアム・スタイロン、アーネスト・ゲインズらの主要作を取りあげ、個別的に論じてきた。『南部の精神』という独自の歴史研究の著作をのこしたウィルバー・J・キャッシュについても論じている。こうした研究のプロセスにおいて、これまでの南部文学研究があまり取りあげていない作家、作品にも光をあてる必要があるのではないかと考えるにいたった。フォークナー、南部農本主義者、ノースカロライナ大学を中心とした社会学者たちといった研究対象が、いわばこの時期の文学・思想研究の制度と化してしまって、そこから暗黙のうちに排除されている領域がありはしないかという疑問が生じてきたのである。そこで 1940 年代初頭の文学作品に焦点を絞り、ウィリアム・フォークナーの小説『村』に加えて、これまですくなくとも日本では論じられることがあまりなかったウィリアム・アレクサンダー・パーシーの自伝『護岸の灯火』やジェイムズ・エイジーのノンフィクション『われらが名士を讃えん』を研究対象とすることにした。文学ジャンルや人種、階級、ジェンダーの多様性を考慮して、ゾラ・ニール・ハーストンの自伝『路上の砂塵』も加えることとした。

２．研究の目的

筆者の最終的な目標は、南部文芸復興期の文学と思想にどのような文化的神話やイデオロギーが作用しているかを広く文化史や思想史の流れのなかで考察することによって、この時期の包括的研究を行うことである。そのためほぼ同時期に書かれた、文学ジャンルや、作者の人種、階級、ジェンダーが異なる上記の四作品を取りあげ、相互照射することにした。それが本研究の目的である。

３．研究の方法

研究課題の性質上、先行研究の調査、収集、整理、解読、および文学テクストの解読、分析といった文献研究が基本的な研究方法である。

文学作品の研究を基礎としているので、まずは文学テクストを綿密に解読、分析し、そのうえでそれを、先行研究の調査、整理によって得られた南部文化史や思想史の広いパースペクティヴのなかに置いて考察するという手順を、本課題の研究方法とした。

４．研究成果

研究対象にあげたパーシーの自伝に関しては、「W. A. パーシー『護岸の灯火』――引き裂かれた自己と南部貴族の黄昏」という論文を『英語英文学論叢』第 66 集に発表した。フォークナーの『村』については、登場人物のひとり V. K.ラトリフの語り口の分析と当時の文化的言説の検討をとおして南部の変貌がどのように描かれているかを考察し、草稿を執筆した。ただ、まだ未定稿であり、さらに加筆修正のうえ平成 28 年度中に学術雑誌に発表する予定である。エイジーの『われらが名士を讃えん』については、フォークナーの『村』における農民像との比較を念頭に置いて、現在テクストの分析を行って

いる段階である。ハーストンに関しては、残念ながら時間切れで本研究期間内に取りあげることができなかった。

ただ、これは当初の研究計画には入っていなかったが、学会活動の都合上ロバート・ペン・ウォレンに関する研究を行う必要が生じ、「ロバート・ペン・ウォレン『天使の群れ』と白人性」という口頭発表を、九州アメリカ文学会第 61 回大会（鹿児島大学）シンポジウム「アメリカ南部と白人性」において行った。また、「南部作家とジョン・ブラウン――ロバート・ペン・ウォレン『ジョン・ブラウン伝』を中心に」という論文を、松本昇・高橋勤・君塚淳一（編）『ジョン・ブラウンの屍を越えて』（金星堂）において発表した。

以下、個別の研究成果についてその概要をまとめておく。

（１）「W. A. パーシー『護岸の灯火』――引き裂かれた自己と南部貴族の黄昏」

ウィリアム・アレクサンダー・パーシー（ウィル・パーシー）はミシシッピ州デルタ地方の小都市グリーンヴィルの大農園主の息子である。パーシー家は遠くヨーロッパ中世の貴族に淵源をもつといわれる貴族的名家であり、ウィルの祖父は南北戦争中「デルタの灰色の鷲」と称された武勇の人で、ミシシッピ州議会下院議長を務め、再建期には黒人の政治勢力を放逐した人物である。一方、ウィルの父で弁護士のリロイは合衆国連邦議会の上院議員に選出されたこともある人物で、地元で大きな政治的力をもっていた。また南部社会の支配的白人層の伝統的価値観を体現する人物であった。それにたいして、ウィルは数冊の詩集を公刊している詩人であり、繊細で小柄で、祖父や父のような勇敢な男らしさとはかけ離れた人物であった。近年の研究では同性愛的性向があったと言われている。このように偉大な祖父やとくに父と自分とのあいだの懸隔の意識から、ウィルはいわば自己を引き裂かれていた。

父を崇敬しつつも、とうてい父のような存在にはなれないという意識をもちつつ、ウィルは父にたいして自己証明をしてみせねばならないと感じていたように思われる。この自己証明の最大の機会が 1927 年のミシシッピ川の歴史的な大洪水とともに訪れる。この洪水では数千人の死者と 70 万人もの難民がでたといわれ、広大な土地が水没し、水が退くのに４か月もかかったそうである。ウィルは洪水救援委員会の委員長として救援活動の指揮を執ることになる。大混乱のさなか獅子奮迅の活躍で秩序を回復するのだが、ひとつ問題が生じる。州兵に出動してもらいミシシッピ川の堤防に緊急避難していた白人住民を他地域に無事に避難させたあと、黒人を避難させる段になって、パーシー家の友人たちや農園主たちから反対の声が上がる。いったん黒人たちを他の地域に移動させてしまえば、黒人たちは帰ってこなくなるのではないかと懸念したのである。この件で父リロイに相談したウィルは父の忠告にしたがって再度救援委員会で会議を開く。するとそれまでウィルを支持していた委員たちが手のひらを返して黒人を移動させることに反対するのである。黒人の労働力が失われるとグリーンヴィルの経済がたちゆかなくなると考えた父が根回しをしていたのであった。かくして、ウィルの父にたいする自己証明は、ほかならぬその父によって不首尾に終わらざるを得ないという結果を招いたのである。

この自伝において、このエピソードでの父のふるまいやそれにたいするウィルの思いや論評は直接的には一切書かれていない。しかし、このときウィルのなかで何かが瓦解していったのではないかと思われる。南部の伝統的価値観を体現していたはずの父にたいするかすかな失望ないしは幻滅のようなものが、ウィルのどこか心の奥底に生じたのではないかと考えられる。私見によれば、その

ことはこのエピソードのあと作品の構造に生じた変化に現れている。それまでは基本的に自伝叙述の定石どおりに時系列に沿って生涯の出来事が語られていたのだが、洪水のあとの数章は物語的な叙述ではなくて、農園主や分益小作制や人種関係についてのウィル自身の見解が生のまま表明されたり、また日記の断片のみで一章が費やされたりしているのである。また、ウィルは父と母の死後自分の人生は余生であったとも書いている。この洪水の章以降の作品構造の揺らぎは、ウィルが父およびその体現する世界から離脱してしまったことを反映しているように思われる。そして南部の社会構造や制度についてのウィルの生のままの見解の表明は、それまで自分が信奉してきた南部の伝統的価値観の断片的で空疎な残骸の呈示として読めるのではないかと思われる。ウィルにとって余生とは、生の充足感が失われたことを意味しており、彼はいわば南部貴族の英雄たちの黄昏のなかに、父から見放され、そしておそらく同時に自分から父を見放して、拠り所もなく立ちつくしているのである。

フレッド・ホブソンによれば、南北戦争後、南部の歴史にたいして旧南部の文化的伝統や価値観をノスタルジックに擁護する保守的懐古派と、恥辱と罪悪感とにさいなまれつつ過去を批判的に吟味するリベラル派の二つの陣営が存在することになったという。そして、従来ウィル・パーシーの『護岸の灯火』は前者に属する作品とみなされてきた。しかし、上述のようにみてくると、かならずしもそうとは言い切れず、むしろパーシーの立ち位置はリベラル派的な歴史観の胚胎する場所からそれほど隔たってはいないのではないかと思われるのである。その意味で、本論文はパーシーの思想史的位置づけの再考を促すものとなっている。

（２）フォークナー『村』に関する草稿

これはまだ未定稿であり、今後さらなる加筆修正が必要である。したがって、以下には基本となる論点を簡略に書きしるすのみにとどめておく。

『村』は南部の片田舎を舞台に、貧農のスノープス一族、とくに拝金主義の権化ともいうべきフレム・スノープスの社会的上昇と、彼に知略の戦いを挑む旅回りの行商人 V. K. ラトリフの話を軸に、フレムの打算的な結婚にたいして、いくつかの夫婦の愛や結婚生活、さらには知恵遅れのアイクと牝牛との牧歌的かつ戯画的な愛と交情を対比しつつ、ほら話のおおらかなユーモアをまじえつつ南部の村の世界を描いた豊穣な作品である。

豊かで多面的であるためにさまざまの読みが可能であろうが、近年の歴史主義的な批評傾向を参照しつつ、ラトリフの語り口の問題と当時の文化的言説の分析を切り口に、この作品にどのような南部の文化的自画像がみられるかを検討している。とくに現時点で参照し、依拠している先行研究はチャールズ・ハノンの『フォークナーと文化の言説』とリチャード・ゴッデン『ウィリアム・フォークナー　複雑な言語のエコノミー』に収められた二つの『村』論である。難解であるが、従来の新興の商業主義的勢力の興隆という見方の奥に横たわっている多層的なイデオロギーが掘り起こされる可能性が潜んでいる。

（３）「南部作家とジョン・ブラウン――ロバート・ペン・ウォレン『ジョン・ブラウン伝』を中心に」

この論文において筆者は三人の南部作家・詩人のジョン・ブラウン像を検討した。アレン・テイトの『ストーンウォール・ジャクソン伝』におけるブラウンへの言及、ウィリアム・フォークナーの『行け、モーセ』におけるブラウン像、そしてウォレンの『ジョン・ブラウン伝』において描きだされたブラ

ウン像である。

テイトはブラウンを奴隷解放という理念にとり憑かれた「狂信者」とみなし、その背後に北部の歴史感覚や現実感覚の欠如、「個人」への楽天的な信頼、「自由」や「平等」といった理念の抽象性をみてとり、それを激しく非難している。

フォークナーの場合、『行け、モーセ』の主人公アイク・マッキャスリンが、従兄違いのキャス・エドモンズとの対話のなかでみずからの歴史観を開陳する場面でブラウンへの言及がなされている。アイクはブラウンの思考や行動の純粋さ、迷いのなさに魅かれているが、そこには現実の複雑さを捨象する単純化や観念性の危険が潜んでいる。アイクのブラウン像は、歴史の始源に土地がだれのものでもない共有の状態を想定し、罪と汚辱にまみれた世界を乾坤一擲再創造したいという彼のやむにやまれぬ楽園回復の願望に根ざしていると考えられる。その意味で、アイクのブラウン像は神話化されたものであるが、作者フォークナーはそのアイクの世界観をさまざまな形で相対化する装置を作品内に組みこんでいる。したがって読者はそれらの装置をとおして相対化されたブラウン像を自分なりに構築するように仕向けられているといえる。

ウォレンの『ブラウン伝』は、ブラウンが北部においていかに「殉教者」として形成されていったかを丹念にたどり、それをとおしてブラウン批判を行った著作と考えることができる。ウォレンは、ブラウンが彼の信奉者たちによって奴隷制度廃止という理想に準じた「殉教者」として神話化され、またウォレン自身みずからを同じように神話化しているさまを描きだしている。相次ぐ事業の失敗によりたえず貧困と借金に悩まされていたブラウンは、一気に事態を好転させるような機会を窺っており、また信仰をもち機会をみずからの手でつかむものにたいして神は物質的恵みを与えてくれるというカルヴィン主義的考えを抱いていた。つまり、ブラウンは一方でアメリカの夢の信奉者であり、またもう一方では神話化による自己形成を行っており、その二重の意味でセルフメイド・マンであった。

ウォレンはこの神話化されたブラウン像を、ハーパーズ・フェリーの連邦兵器工場襲撃にいたるブラウンの一連の行動に潜む利己的で世俗的な動機を暴露することによって脱神話化している。また、エマソンをはじめとする超絶主義者たちのブラウン賛美の根っこにある「道徳律」(the higher law)を批判している。彼らにとってブラウンが体現している「道徳律」により、横領も略奪も流血も殺戮もすべてが赦されてしまうことを批判したのである。不完全な存在である人間が、さまざまな制約や対立のなかで、利害を調節しながら生きていくのではなく、自分こそが真実を知っていると考え一足飛びに独善的な真理の領域に飛躍してしまうような思考や行動をウォレンは批判したのである。

この論文の骨子は上述のとおりであるが、この論文も南部の文化的自画像の考察という本研究の課題に密接に関連するものである。上述のウォレンのブラウン批判、エマソン批判はテイトの北部批判に通底している。またフォークナーのアイクの思想の相対化とも響きあうものである。つまり、現実を観念的また抽象的に捉えてしまいがちな北部の傾向にたいして、歴史や現実の複雑さ、人間の不完全さの認識に立って世界を見る南部作家たちのまなざしをそこにみてとることができる。その意味で、この論文は南部の文化的自画像をいわば裏側から明らかにしたものだといえる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 小谷耕二、W．A．パーシー『護岸の灯火』――引き裂かれた自己と南部貴族の黄昏、英語英文学論叢、査読無、No．66、2016、pp．1－13

②小谷耕二、『見えない人間』再考――アメリカ文学の伝統とラルフ・エリスンのアメリカ、英語英文学論叢、査読無、No．64、2014、pp．1－17

③ 小谷耕二、アレン・テイト『父たち』再考――南部の文化的自画像を読む、英語英文学論叢、査読無、No．63、2013、pp．43－65

④ 小谷耕二、モリー・ビーチャムと歴史の書き直し、言語科学、査読無、No．48、2013、pp．31－41

〔学会発表〕（計２件）

① 小谷耕二、ロバート・ペン・ウォレン『天使の群れ』と白人性、九州アメリカ文学会第 61 回大会、2015 年 5 月 10 日、鹿児島大学

② 小谷耕二、アレン・テイト『父たち』と南部の文化的自画像、九州アメリカ文学会第 58 回大会、2012 年 5 月 12 日、熊本大学

〔図書〕（計１件）

① 松本昇・高橋勤・君塚淳一（編）金星堂、ジョン・ブラウンの屍を越えて――南北戦争とその時代、査読有、2016、pp．253－276（小谷耕二、南部作家とジョン・ブラウン――ロバート・ペン・ウォレン『ジョン・ブラウン伝』を中心に）

６．研究組織

(1)研究代表者

小谷耕二（KOTANI, Koji）

九州大学・大学院言語文化研究院・教授

研究者番号：４０１２７８２４